26　次の文章は唐の太宗、李世民（在位六二六～六四九）が語った言葉である。これを読んで、後の設問に答えよ。ただし、設問の都合で送り仮名を省いたところがある。

〈東京大〉二〇二三年度出題

　朕　　　武　帝　レ レ 　已　後、　二 　一、不三 　  
二 　治　一。　　レ 、二 　子　一 、「吾　レ 二 主　一、不レ 二 経　　遠　一、　二 平　　常　一。此　下 二 　子　一 上 也。ａ　身　猶　可二 以　免一。」二 諸　一 、「此　　　レ 　。」二 　一、　二 淫　　一レ 。ｂ前　史　  
美レ 之、　レ 二 於　先　一。

　　　不レ 。 曽　之　不　、　罪　　矣。　二 人　  
一、 レ レ 、 レ レ 、将二— 　　一、  
中— 　　上。所二— 以　　一レ 　也。曽　位　二 台　一、名　器　崇　。 ｃ直レ 辞　　、レ ｄ佐一レ 時。今　　 二   
ｅ後　言一、 二 　一。　二 明　一、不二 　一 乎。ｆ 而　レ 、　二 　一。　　　　　　　　　　　　（『貞観政要』による）

〔注〕　○晋武帝―司馬炎（二三六～二九〇）、魏から禅譲を受けて晋を建てた。

○呉―国の名。

○驕奢―おごってぜいたくであること。

○何曽―魏と晋に仕えた人物（一九九～二七八）。子に劭、孫に綏がいる。

○淫刑―不当な刑罰。

○将順―助け従う。

○匡救―正し救う。

○台司―最高位の官職。

○名器―名は爵位、器は爵位にふさわしい車や衣服。

○廷諍―朝廷で強く意見を言うこと。

○相―補助する者。

問１　傍線部ｂ・ｃ・ｄを平易な現代語に訳せ。

問２　「爾身猶可二以免一」（傍線部ａ）を、「爾」の指す対象を明らかにして、平易な現代語に訳せ。

問３　「後言」（傍線部ｅ）とあるが、これは誰のどのような発言を指すか、簡潔に説明せよ。

◎問４　「顚而不レ扶、安用二彼相一」（傍線部ｆ）とあるが、何を言おうとしているのか、本文の趣旨を踏まえてわかりやすく説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　ｂ＝Ａ前代のＢ歴史書はＣ何曽をＤ賛美し

Ａ＝２〔「過去の」など同内容可。〕

Ｂ＝２〔「史官は」なども可。〕

Ｃ＝３

Ｄ＝３〔同内容可。〕

　　　ｃ＝Ａ言葉をＢ率直にして

Ａ＝５

Ｂ＝５〔「まっすぐにして」「正直にして」や「包み隠さず」など同内容可。〕

　　　ｄ＝Ａ時の皇帝をＢ補佐する

Ａ＝５〔同内容可。〕／Ｂ＝５〔同内容可。〕

問２　Ａ息子の劭よ、Ｂおまえの身はＣまだＤ難を逃れることができるだろう

Ａの内容がなければ全体０。

Ａ＝３〔「劭」だけでも可。〕

Ｂ＝２／Ｃ＝２

Ｄ＝３〔「難」は「混乱による死」など同内容可。「可」（～できる）の訳ができていなければ不可。〕

問３　Ａ武帝は国の将来を考えていないので、晋の治政は続かないと批判したＢ何曽のＣ陰口。

Ｂがなければ全体０。

Ａ＝４〔同内容可。何曽の発言を踏まえた内容であること。〕

Ｂ＝３

Ｃ＝３〔「批判した発言」など同内容可。〕

問４　Ａ国の危機であるのに、Ｂ皇帝を諫めて国を助けないようなＣ補佐役は必要ないということ。

Ａ＝３〔同内容可。〕

Ｂ＝３〔同内容可。〕

Ｃ＝４〔「補佐役」は「補助する者」なども可。〕

【書き下し文】

　くのをげしより、めにり、たをにめず。よりき、のにひてはく、「にゆるに、のをぜす、だのをく。のにすにざるなり。のほてるべし。」と。をさして曰はく、「此ずにひてせん。」と。のにび、してのすとる。をとし、以てにかなりと為す。

　朕がはらず。らく曽のは、其のなり。れと為りては、にみてはをくさんことをひ、退きてはちをはんことを思ひ、其の美をし、其のをすべし。にを為すなり。曽をめ、なり。当にをくしてし、をじてをくべし。ち退きてはり、進みてはし。以てと為すは、たりならずや。れてけずんば、くんぞのをゐんや。

【現代語訳】

　私は聞いている、晋の武帝は呉を平定してから以後、つとめておごってぜいたくをすることがあり、二度とは政治に心を留めなかった。何曽は朝廷から退き、彼の子劭に告げて言った、「私が主上にお目にかかるごとに、国を治める遠大なはかりごとを論じないで、ただ日頃の普通の話をするだけだった。これは子孫に（国を治める遠大なはかりごとを）残す者ではない。問２おまえの身はまだ難を逃れることができるだろう」と。孫たちを指さして言った、「この者たちは必ず乱に遭って死ぬだろう」と。孫の綏（の時）に及んで、はたして不当な刑罰で殺された。問１ｂ前代の歴史書は彼を賛美し、そして先見の明があるとした。

　私の意見はそうではない。思うに（何）曽の不忠は、その罪は大きい。そもそも人臣となったなら、（君主の前に）進んでは誠を尽くそうと思い、退いては（君主の）過ちを補うことを思い、その（君主の）美徳を助け従い、その（君主の）悪を正し救うべきである。（これこそ）共に治をなす方法である。（何）曽は（その）位は台司（という最高位の官職）を極め、その爵位と爵位にふさわしい車や衣服で（その姿は）崇高で重々しい。当然

問１ｃ言葉を率直にして諫め正し、（政治の）道を論じて問１ｄ時の皇帝を補佐すべきである。（なのに）今はそこで退いては陰で悪口を言い、進んでは朝廷で強く意見を言うことがない。それを（歴史書が）知恵がすぐれているとするのは、なんと過ちではないだろうか。倒れて（それなのに）助けなければ、どうしてその補助する者を用いるだろうか、いや用いない。